

平成30年 2月

# 仁科祐子 学位論文審査要旨

主 査 深 田 美 香  
副主査 前 垣 義 弘  
同 吉 岡 伸 一

## 主論文

A survey of epilepsy-related knowledge, attitudes and practices of home healthcare nurses in the San-in region of Japan

(山陰地区の訪問看護師のてんかんに関する知識、態度、実践についての調査研究)

(著者：仁科祐子、吉岡伸一)

平成30年 Yonago Acta Medica 掲載予定

## 参考論文

1. 訪問看護師の仕事満足度を高める臨床心理研修プログラムの試行と評価

(著者：仁科祐子、金子周平)

平成28年 米子医学雑誌 67巻 49頁～55頁

# 学 位 論 文 要 旨

A survey of epilepsy-related knowledge, attitudes and practices of home healthcare nurses in the San-in region of Japan

(山陰地区の訪問看護師のてんかんに関する知識、態度、実践についての調査研究)

てんかんの有病率は人口1,000人あたり3.3-7.8人と言われ、決して少なくない神経疾患の一つである。また、小児期から高齢期の全ての年代で発症し、近年、高齢者のてんかんが増加してきている。てんかんのある人が在宅生活を送るためには、医療に加え、心理・社会的側面も含めた包括ケアが必要であるが、日本においてはその体制は十分ではない。そこで本研究では、地域における包括ケアの要と期待される訪問看護師の、てんかんに関する知識、態度、実践の現状についての調査を実施し、訪問看護師へのてんかん教育の在り方を検討した。

## 方 法

鳥取県、島根県の訪問看護ステーションに従事する看護職員546人を対象として、2014年6月から2014年8月の期間に無記名自記式質問紙調査を郵送法で実施した。調査項目は、てんかんの知識、態度に関する先行研究の中から、医療関係者や看護学生を対象とした論文を参考として調査項目を選定し作成した。てんかんに関する知識では、てんかんの有病率、てんかんの原因、発作の症状、発作時の対応、てんかんの治療・ケアについて尋ねた。てんかんのある人に対する態度では、「てんかんのある人は各項目に対してどの程度制約をうけると思うか」と尋ね、教育、運転、就職、旅行等8項目に対して4件法で回答を求めた。てんかんに関する経験では、これまでの学習経験、てんかんのある人と知り合った経験等を尋ねた。てんかんのある人への訪問看護実践では、特発性・症候性てんかんのある利用者の訪問看護経験、その時の看護実践内容、今後のてんかん訪問看護実践に対する意向を尋ねた。分析は基本統計量とカイ2乗検定を用いた。

## 結 果

有効回答は285(52.2%)、平均年齢は48.9±9.2歳、訪問看護経験年数は平均7.1±5.5歳であった。てんかんの原因について正答率が高いものは、脳血管疾患、頭部外傷、脳腫瘍であったが、認知症は13.3%と低かった。てんかん発作時の正しい対処法について正答率

の高いものは、外傷を防ぐ、窒息を防ぐ、発作症状を観察する、であったが、「口の中にもものを入れる」をあげた人が29.8%であった。てんかんのある人に対する態度では、「どちらかという制約がある」と考える人の割合が高かった項目は「運転」(81.4%)「就職」(38.2%)であり、低い項目は「社会参加」(10.5%)「交友関係」(6.7%)であった。特発性てんかんのある人への訪問看護経験者は6.3%、症候性てんかんのある人への訪問看護経験者は41.4%、特発性か症候性かを問わずてんかんのある人を訪問看護した経験がある人は43.9%であった。訪問看護実践内容としては、「発作の頻度、程度、症状の確認」「服薬支援」などの医療的ケアや「生活での困りごとを聴く」「日常生活の指導」などの日常生活ケア、「主治医との連携」「家族ケア」などは高い確率で実施されていたが、「社会資源に関する情報提供」は18.4%と低かった。訪問看護においててんかんに関する知識や技術が必要と考える人は95.8%、てんかんに関する研修会に参加したいという人は87.7%であった。てんかんのある人への訪問看護経験の「あり」群は「なし」群よりもてんかんに関する研修会へ参加したい人の割合が有意に高かった。

## 考 察

てんかんに関する知識は先行研究と比較して高かった。これは症候性てんかんの訪問看護経験者が4割を超えていたため、てんかんの原因等の正答率が高くなったためと考えられた。しかし、てんかんの原因として認知症の正答率は低く、今後増大が見込まれる認知症に伴うてんかんについての情報提供が必要である。てんかん発作時の対応の正答率は概ね高かったが、「口の中にもものを入れる」といった誤った認識もあり、最新知識の提供が必要である。てんかんに対する態度では、「運転」に制約があると回答した人の割合が高く、高齢者や認知症でも同様に制約がある運転に関しては関心が高いものと考えられた。てんかんのある人への訪問看護実践内容では、医療的ケアや日常生活のケア、てんかん主治医との連携、家族ケアなどはよく実施されていることが明らかとなった。一方で「社会資源に関する情報提供」をしている割合は低く、てんかんのある人が活用できる社会資源についての情報提供や資源開発が必要である。

## 結 論

てんかんのある人への訪問看護経験のある人は多く、てんかんの知識は全体的に高かったが、認知症に伴うてんかんやてんかん発作時の対応についての知識はやや不十分であった。また、てんかんのある人への訪問看護実践内容として社会資源の情報提供の実施率が低かった。訪問看護師に向けた最新知識の情報提供が必要である。